



■	目次	説教 復活の希望	…… 森下 一彦 …… 1
		教会の課題 再び、すべてを伝道にむけて	…… 浅田 忠敬 …… 2
		旧約聖書に聴く「コヘレト、太陽の下で」	…… 片野安久利 …… 3
		信仰問答を学ぶ『ハイデルベルク信仰問答』(四)	…… 登家 勝也 …… 4
		今、教会を考える⑩ 教会生活のよこごび	…… 岡田 宏明 …… 5
		教会、この地とともに② 仙台黒松教会	
		神様の恵みに応えて	…… 千葉 与志 …… 6
		さんびかに生かされて	
		讃美歌は時代を反映する	…… 工藤 準一 …… 7
■		スイッチインタビュー① 青年からの問いかけ	
		どうして神を信じられるのですか	…… 藤守 麗 …… 7
		こいのにあ 改革派（長老主義）教会における正義と平和	
		—今日の世界において考える—	…… 澤田 磐雄 …… 8
		教会ニュース	…………… 8

復活の希望

最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。
(コリントの信徒への手紙—15章3節)

もり した かず ひこ
森 下 一 彦

今夜（2月17日）から明日にかけて猛吹雪になり60cmの積雪が予報されている。しかしこの福音時報が届く4月には幾らか暖かい春が訪れていることだろう。

北海道の冬は厳しい。とりわけオホーツク海側の地域では12月から2月にかけて最高気温が氷点下の日々が続く、気温がプラスに上がることはほぼない。大地が白一色に覆われ、雪と氷の世界が春まで続く。どれほど科学が進歩し、人間の英知を結集しても、厳しい冬の現実を変えることはできない。季節には従わざるを得ないのである。部屋の中はストーブを焚き快適な暖かさを意のままにして生活することはできる。しかし、家の外は厳寒の世界が広がり、マイナス20度を下回ることも度々ある。もし、吹雪が長く続いて国道が遮断され、停電になり、石油が尽きれば、私たちの命も尽きてしまう。人間は自然の摂理に逆らうことはできないのである。人の命も同様であろう。医療の技術が進み、ある程度延命が可能になっても、私たちは死に^{あらが}抗うことはできない。

冬は終わる。寒く厳しい冬の後には春が訪れることを知っている。長い冬に命は芽吹かない。冬はまるで死が支配する季節のようだ。しかし、春になり雪解けが進むと、野山は一斉に若葉を芽吹き、命が甦る。北海道ではこの春の時期にイースターを迎える。私たちにとって喜びの時である。だが、誤解してはならない。キリストの復活は、巡り来る季節や自然の摂理の外の出来事である。復活を身の回りの事柄に類比して捉えることは許されない。復活は他に例のない大いなる神の奇跡である。決して繰り返す季節の中でキリストの復活を実感することはできない。しかし、それでも、イースターと共に暖かな

春が来る。春にこそ新たな命の希望が告知される幸いを思う。

復活は父なる神ご自身が制定されたあらゆる法則や秩序をこえて呼び起こされた恵みであり、私たちの希望である。希望であるがゆえに、この身をもって示す以外に証明できない。古代の人々も復活を容易に信じることはできなかった。使徒パウロは言う、「キリストは死者の中から復活した、と宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のある者が、死者の復活などない、と言っているのはどういうわけですか」（I コリ15:12）と。コリントの教会の中にも、復活を受け止められなかった人がいた。

パウロはキリストが復活しなかったのなら、私たちの宣教も信仰も無駄であり、神の偽証人とさえみなされてしまうという。復活が語られない福音ほど空虚なものはない。復活は福音の要であり、内容そのものである。もし復活が神話や、人間の内的体験に限定された出来事ならば、実際には復活がなかったのと同じである。復活は啓示に基づき、福音の宣教と共に顕示される。それはパウロ自身が「最も大切なこと」として受け取った信仰そのものであった（15:3-8）。キリストは死んで復活したのである。そして、パウロ自身が復活の主と出会い、教会を迫害する者から、使徒へと変えられたのである。

十字架で処刑された者は多い。しかし、復活されたのは御子イエス・キリストのみである。この恵みは、宣教しなければ伝わらない。この信仰は聖霊を介さなければ受け取ることができない。やがてすべては明らかになる。やがて主イエス・キリストをこの目で見る日が来るのである。

(北見教会牧師)